岐阜経済大学論集 35 巻 2 号（2001 年）

ホブソンにおける「資本主義」語

――「資本主義」語のはじまり（8）――

重　田　澄　男

I. 1870 年代以降の資本主義の激動
II. 人物と社会的活動
III. 『近代資本主義の進化』初版
1. 基本的内容
2. 初版における「資本主義」語
3. ホブソンのマルクス評価
IV. 1906 年以降の増補改訂版
1. 増補改訂の内容
2. 増補改訂版における「資本主義」語

I. 1870 年代以降の資本主義の激動

自由競争の資本主義は，1860 年代から 1870 年代にかけてその全盛期にたっしたが，それは同時にその崩壊のはじまりでもあった。その転機をなしたのは 1873 年の恐慌である。それ以後，約 30 年にわたって，新たな構造をもつ資本主義への再編成のための激動の時期がつづく。

19 世紀の後半期には，重化学工業を中心とした技術の変革があいついでおこったが，これらの技術的変革の導入の過程で，1861–65 年の南北戦争によって工業ブルジョアジーの支配力を強化したアメリカと，1870–71 年のフランス・プロシャ戦争の勝利によって統一国家としてのドイツ帝国の形成を

なしとげ，さらに50億フランの賠償金と豊富な鉄鉱資源をもつアルザス・ロレーヌ地方とを手に入れたドイツとは，それぞれ重化学工業を中心に工業化と生産規模の巨大化をおしすすめ，その結果，“世界の工場”としてのイギリスの地位は1870年代には崩れはじめ，1890年頃にアメリカに追いこされ，20世紀のはじめには，世界第2の工業国としての地位もドイツに奪われてしまうにいたる。

このようなイギリスの工業独占の崩壊の過程は，同時に，産業構造の高度化をともなう生産規模の巨大化の過程であり，また，並びたつ資本主義諸国のあいだの激烈な国際競争をともなう資本主義世界の再編成の過程でもあった。

このような資本主義の激動のなかで，巨大な生産設備をもった少数の大企業が現われて，カルテル，シンジケート，トラストなどの産業独占体が形成されるようになってくる。これらの産業独占体は，初期独占のように国家規制にたよるものとは違って，もっぱら私的資本としてのその経済力によって支配をはかる近代的な独占に他ならないものであった。

このような産業独占体は，1873年恐慌以後，次第に拡がって，発生・改組・崩壊・再組織をくりかえしながら，より強力なものへとすすんでゆき，19世紀末には資本主義経済の基礎にしっかりと根をおろすようになってくる。

他方，銀行などの金融業にも少数の巨大資本が現われて，生産・運輸・商業・信用などあらゆる経済部面にわたってその中軸部分をにぎり，産業独占体とも結びつき，金融的支配の網の目をはりめぐらせてコンツェルンを形成するようになり，経済のみならず政治機構にたいしても支配力をかためて，体制的な支配力をもつ金融資本が生まれることになる。

このようにして形成された産業独占体と金融資本は，巨額の独占利潤をめざして，生産の調整や価格の協定などによる独占価格のつり上げ，あるいは，株式の操作や投機，さらには詐欺的行為などをもおこない，また，対外

的にも，独占的保護関税，ダンピング，資本輸出などとともに，国際カルテルの形成によって，世界市場における支配領域の拡大と分割をはかろうとする。

ところで，鉄道と汽船による交通手段の発達，電信・電話による通信網の拡大と，1869年のスエズ運河の開通は，資本主義諸国における海外進出への刺激をあたえ，1870年代から20世紀初頭にかけての「新しい植民地拡張の時代」をひきおこしたが，それは経済基盤の構造的変化におうじた新たな意義をもつものであった。

この時期にもっとも烈しく略奪されたのはアフリカで，1876年には10.8%しかなかった植民地面積が，1900年には90.4%となっている。南アフリカの金鉱とダイヤモンド鉱の確保のために，20万人の死者を出しながら強行されたイギリスによる南ア戦争（ボーア戦争，1899–1902）は，その代表的な事例である。

このようにして，20世紀のはじめまでには，地球上のほとんどが資本主義列強によって分割しつくされ，もはやこれ以上の支配権の拡大は，他の帝国主義国の領土を力ずくで奪い取るという再分割しかありえなくなり，帝国主義戦争の時代の幕開きとなる。

ホブソンが『近代資本主義の進化』（1894年）のなかでトラストなどの独占を取りあげ，南ア戦争を直接見聞して『帝国主義論』（1902年）を書いたのは，まさにこの時期のことである。

II. 人物と社会的活動

ホブソン（John Atkinson Hobson, 1858–1940）は，1858年に，イングランド中部に位置する商工業と地方行政の中心地であり，イギリス絹織物工業発祥の地として，また製陶業でも有名なダービーにおいて，自由主義的な新聞経営

者の家に生まれた。

1880年より1887年までオクスフォードのリンカーン・カレッジで，とくにその最初の4年間には主としてラテン・ギリシャの文芸・哲学といった古典人文学を学んだが，のち経済学の研究を始めた。

1889年に『産業の生理学』を公刊し，パブリック・スクールの教師を辞めてロンドンの大学公開講座の経済学と文学の講師の仕事にすすもうとしたが，反正統派経済学的見解がたたって講座の提供は拒否され，やむなくオクスフォードの公開講座の地方での講師をつとめたのち，独立の文筆業者となって，経済学の他に政治学，社会学から倫理学にも及ぶ旺盛で活発な社会批判，文明批評的な文筆活動をおこなった。

彼の反正統派的な過小消費説的見解の基本的内容は，資本主義のもとでは分配の不平等のため消費が過小になって過剰貯蓄と過度の投資をもたらし，そのため生産過剰になるというものである。ホブソンのこの見解は，当時のイギリスの経済学の学界と大学アカデミーに受け入れられず，みずからも異端の経済学者としてその生涯を在野の存在として過ごすことになった。

彼は，1894年に『近代資本主義の進化』を出版して，資本主義の発展をなによりも機械制生産の展開の過程としてとらえ，さらに資本主義の発端からトラストなどの独占の形成にいたるまでの産業や企業や市場の構造における変化の様相をあとづけながら，そのような変化が労働者に及ぼす影響について追求した。また，1899年には『マンチェスター・ガーディアン』紙の特派員として南アフリカにおもむき，南ア戦争直前と開戦当時の状況を直接見聞するなどの体験に刺激されて，1902年に名著『帝国主義論』を執筆出版して，みずからの過小消費説にもとづいて帝国主義の経済的根底を明らかにした。

彼のそのような帝国主義批判はフェビアン社会主義の立場にたつものであった。彼は，19世紀から20世紀への転換期の時期には自由党の指導的理論者の一人として福祉国家の基礎づくりに貢献し，両大戦間期には独立労働

党の産業・経済政策ブレーンとして活躍した。それとともに，『ネーション』や『マンチェスター・ガーディアン』など二十数紙誌の編集者，常連執筆者として，半世紀にわたってイギリス急進主義の論調に大きな影響力をもったジャーナリストでもあった。

ホブソンは，1938年，80歳のときに，自己の生涯の知的遍歴をふりかえりながらプライベートな側面ぬきに自己の思想と社会的活動に重点をおいた自叙伝『異端の経済学者の告白』を出版しているが，その2年後の1940年に死亡している。

彼の主たる著作は次のごとくである[1)]。

〔主要著書〕[2)]

(1) (with A.F. Mummery) *The Physiology of Industry; Being an Exposure of Certain Fallacies in Existing Theories of Economics.* 1889, London, Murray. xvii, 215p.（マメリーと共著）『産業の生理学；経済学の現存理論における一定の誤論の露見において』

(2) *Problems of Poverty; An Inquiry into the Industrial Condition of the Poor.* 1891, London, Methuen, vi, 232p. University Extension Series.『貧困問題；貧民の産業的条件への探求』

(3) *The Evolution of Modern Capitalism. A Study of Machine Production.* 1894, London, Walter Scott, xiv, 388p. 松沢兼人・住谷悦治・坂本勝訳『近代資本主義発達史論』弘文堂，1928年（改造文庫，1932年）

(4) *The Problem of the Unemployed: An Inquiry and an Economic Policy.* 1896, London, Methuen, xvi, 163p. 遊佐俊彦訳『失業者問題の研究及経済政策』南郊社，1922年

(5) *John Ruskin, Social Reformer.* 1898, London, Nisbet, v–ix, 357p.『ジョン・ラスキン――社会改革者』

(6) *The War in South Africa: Its Causes and Effects.* 1900, London, Nisbet,

viii, 324p.『南アにおける戦争：その原因と結果』

(7) *The Psychology of Jingoism.* 1901, London, Grant Richards, 139p.『狂信的愛国主義の心理学』

(8) *Imperialism; A Study.* 1902, London, Nisbet, vii, 400p. 石澤新二訳『帝国主義論』改造文庫，1930年，矢内原忠雄訳『帝国主義論』（上・下）岩波文庫，1951，1952年

(9) *Richard Cobden: The International Man.* 1918, London, T. Fisher Unwin, 415p.『リチャード・コブデン：国際人』

(10) *The Economics of Unemployment.* 1922, London, G. Allen & Unwin, 157p. 今村源三郎訳『失業経済』大日本文明協会，1925年，内垣謙三訳『失業経済学』同人社，1930年

(11) *Rationalisation and Unemployment; an Economic Dilemma.* 1930, London, G. Allen & Unwin, 126p. 内垣謙三訳『合理化と失業問題』同人社，1931年

(12) *Poverty in Plenty: The Ethics of Income.* 1931, London, G. Allen & Unwin, 92p. 中島徹三訳『世界経済の統一，なぜ豊年の飢饉か？』千倉書房，1931年

(13) *From Capitalism to Socialism.* 1932, London, Leonard and Virginia Woolf at the Hogarth Press (Day-to-Day Pamphlet No.8) 53p. 岩田百合治『現代経済恐慌と資本主義の将来』章華社，1932年（抄訳）

(14) *Democracy and Changing Civilisation.* 1934, London, John Lane, ix, 170p. 宮西夏樹訳『民主政治と文化の変遷』三一書房，1946年（世界文化叢書）

(15) *Veblen.* 1936, London, Chapman and Hall, 227p. 佐々木専三郎訳『ヴェブレン』文真堂，1980年

(16) *Confessions of an Economic Heretic.* 1938, London, G. allen & Unwin, 217p. 高橋哲雄訳『異端の経済学者の告白――ホブスン自伝』新評論，

1983年

III.『近代資本主義の進化』初版

1. 基本的内容

ホブソンの『近代資本主義の進化』の書名は，より詳しくは『近代資本主義の進化――機械制生産の研究――』（*The Evolution of Modern Capitalism, A Study of Machine Production,* 1894）である。

ホブソンは，その初版の「序文」において，「近代産業における構造的変化のいくつかの法則を述べて説明するために，わたしは，社会的進化についての論文の広範な哲学的サーベイとそして近代的機械制産業の特殊的研究――バベジ（Babbage）の*マニュファクチュアの経済学*およびユア（Ure）の*マニュファクチュアの哲学*，あるいはより最近においてはシュルツェ－ゲヴァーニッツ（Schulze-Gaevernitz）教授の木綿工業の綿密な研究のような諸著作に含まれている――とのあいだの研究に，焦点を絞った」[3]（斜字は原文におけるイタリック，太字は原文における大文字。以下同様）と述べている。

「近代資本主義の進化」というメインタイトルをもった本書のなかでホブソンが明らかにしようとしている内容は，「近代産業における構造的変化」であり，もっと絞っていえば「近代的機械制産業」の「社会的進化」である。すなわち，本書は，機械の使用を基軸とした機械制産業の構造的発展と変化，そして，それに対応した企業形態，経済活動，社会的影響等について解明しようとしたものである。

このことは，自叙伝『異端の経済学者の告白』のなかで，ホブソン自身が述べているところからも明らかである。

「90年代はじめの私の最初の充実した経済学的著作でありイギリス型産業革命のもとに包摂された産業変化を客観的に示した『近代資本主義の進化』〔という〕……書物の主要部分は，近代的な機械・動力が，産業の生産性を引き上げ，労働の節約や市場支配における資本を使用し組織し所有する人たちの重要性を増すにあたって演じた役割の叙述にさかれた。たいていの作業の性質・条件および作業への支払いは，すべて機械化された産業では使用者によって決定され，そして同様に労働以外の生産要素はすべて個人的コントロールから外され，賃金稼得者大衆への人間的配慮のない複雑な協同作業的生産工程に貢献するある単一で狭い行動の遂行に専念するあたらしいプロレタリアートが出現したのである。」[4)]

ところで，ホブソンは，その「〔初版〕序文」において，『近代資本主義の進化――機械制生産の研究――』という本書の書名のなかで使用され，本書の内容を特徴づける用語について，次のような説明をおこなっている。

「“進化 evolution”という用語を使うことによって，わたしは主題の一つとして有機的変化の過程における研究をきわだたせることをもくろみ，そして，そこであらゆる自然的成長を特徴づけるこれらの大きな運動のいくつかを追跡しようと努めた。／***機械制生産の研究***というサブタイトルは，探究のよりいっそうの限定化をしめしている。近代的機械と原動力の作用に特別の注意を向けることによって，わたしは，以前のあらゆる産業的諸時期からこの1世紀半を区分する産業的変化のより実体的な局面について強調して，有機的統一性のよりはっきりした認識を強めることに努めた。」[5)]

そのように，ホブソンは，『近代資本主義の進化――機械制生産の研究――』の内容を特徴づける用語として，「進化 evolution」と「機械制生産の研究 a study of machine production」の2つの用語を取りあげて説明している。

ホブソンは，まず，メインタイトル「近代資本主義の進化 evolution of modern capitalism」に関連して，「“進化 evolution”という用語を使うことによって，わたしは主題の一つとして有機的変化の過程における研究をきわだたせることをもくろみ，そして，そこであらゆる自然的成長を特徴づけるこれらの大きな運動のいくつかを追跡しようと努めた」としている。

ホブソンが，「近代資本主義」の運動についての把握において，development（発達，発展）でも progress（進歩）でもなく，growth（成長）でも expansion（拡大）でもなくて，evolution という用語をもちいたのは，一定の明確な問題意識によるものであって，近代的な機械の発達と機械を使用する生産活動が有機的関連をもった統一体として発展し変化している事態をしめそうとしているのである。

evolution という用語は，the theory of evolution（進化論）やあるいは evolutionist（進化論者）などといった特有の使われ方をしている言葉であって，たんなる量的増大や拡張をしめすものではなく，有機的統一体の進化を，すなわち有機的統一体の質的な構造変化をともなう発展としての進化という特有のあり方を問題にしようとしているのである。だからして，邦訳においても，「近代資本主義」のたんなる「発展」ではなくて，「進化」という訳語があたえられるべきものであろう。

その点，ホブソンの自叙伝『異端の経済学者の告白』の訳者高橋哲雄氏も，「訳者あとがき」のなかで，「ホブスンの著書の題名については，既存の訳書のそれを必ずしも踏襲しなかった。たとえば，*Evolution of Modern Capitalism* を，従来の訳題のように「近代資本主義発展〔ママ〕史論」とか「近代資本制発達史」とせず，「近代資本主義の進化」としたのは，訳語として生硬で奇をてらってみえるかもしれないが，この本はもともと社会有機体論を土台とする進化論のシェーマで書かれたもので，Evolution という題名にはそういう意味が込められていたのだから，当然「進化」とすべきだと考えたのである」[6]（下線は傍点）と指摘されているところである。

ついで，ホブソンは，サブタイトル「機械制生産の研究 a study of machine production」について，「***機械制生産の研究***というサブタイトルは，探究のよりいっそうの限定化をしめしている。近代的機械と原動力の作用に特別の注意を向けることによって，わたしは，以前のあらゆる産業的諸時期からこの1世紀半を区分する産業的変化のより実体的な局面について強調した」と述べている。

ホブソンは，第1章「序説」において，「われわれが主として注意を向けるのは産業に及ぼす機械の発達と影響についてである」として，研究をおこなう諸項目を指摘している。その内容を要約的に整理すると，次のごとくである[7)]。

はじめに，新しい近代的産業が活動する以前の産業有機体の構造の理解。

次に，典型的な機械制産業について，新しい機械と原動力とが適用される順序と速度。

さらに，産業有機体について，産業の規模と構造的特徴に生じた主要な変化と，企業に包含される資本および労働の単位の関係など。

そこにおける機械と工場生産についての次のようなより詳細なる研究。

(1) 資本単位の規模，競争の強さと限界，トラストその他の経済的独占形態の自然的形成。

(2) 労働，雇用の量と規則性，作業の性質と報酬にあたえる機械の影響。産業における女性の地位。

(3) 産業階級に及ぼす消費力の影響，大工業都市の発達が社会の肉体的・知的・道徳的生活に及ぼす影響。

最後に，近代資本家的生産が他の社会的進歩の諸勢力との関係に及ぼす影響と社会の福祉にたいする関係。

以上のような内容をもつものとして書かれた『近代資本主義の進化』の初版は，次のような目次構成をとっている。

序　文
第 1 章　序　説
第 2 章　機械制以前の産業構造
第 3 章　機械産業の発達順序
第 4 章　近代産業の構造
第 5 章　資本における独占の形成
第 6 章　トラストの経済力
第 7 章　機械と産業不況
　補 論 1　消費者の所有のもとにある財貨は資本であるか？
　補 論 2　不況の原因とみなされる“過剰消費”
第 8 章　機械と労働需要
第 9 章　機械と労働の質
第 10 章　高賃金の経済学
第 11 章　近代産業が消費者としての労働者に及ぼす若干の影響
第 12 章　近代産業における女性
第 13 章　機械と近代都市
第 14 章　文明と産業的発達

このように，本書の初版における内容は，まさしく機械制生産の規定的内容，有機的統一体としての産業構造，機械制産業が社会的諸関係に及ぼす影響といったものである。それは，まさに，本書のサブタイトルにしめされた近代社会における「機械制生産」についての有機体的進化の「研究」というべきものである。

2. 初版における「資本主義」語

ところで，初版「序文」において，『近代資本主義の進化――機械制生産

の研究――』という本書の書名に使われている用語の説明にさいして，奇妙なことに，ホブソンは，書名で使われている用語のなかの基本的要因である「資本主義 capitalism」あるいは「近代資本主義 modern capitalism」については取りあげていない。

「近代資本主義の進化」というメインタイトルにとって基本的要因である「資本主義」という用語を，ホブソンはどうして問題にしなかったのであろうか。そもそも，ホブソンにとって，「資本主義」という用語は，いかなる意義あるいは重要性をもった用語だったのか。あるいは，重要性をもたない用語だったのだろうか。

「資本主義」という用語の使用状況についてみると，ホブソンは，本書の初版では，「資本主義」という用語をほとんど使っていない。383 ページもある「初版」の本文のなかで，「資本主義」という用語はたったの 7 回[8)]しか使っていないのである。

しかも，「資本主義」という用語が使われている 7 回のうちの 6 回は，第 1 章「序説」と，第 2 章「機械制以前の産業構造」においてであって，近代的な機械制産業を取り扱った本論部分たる第 3 章「機械産業の発達順序」から第 13 章「機械と近代都市」までの 11 の章のなかではまったく使っておらず，最終章の第 14 章「文明と産業的発達」において 1 回使っているのみである。

そのような「資本主義」という用語の使用の少なさと偏りは，なにを意味するのか。

ホブソンは，第 1 章「序説」のなかで「資本主義」という用語を本書で初めて使うにあたって，「資本主義」用語の意味内容について次のように指摘している。

「ここで採用された方法は，われわれの知的な目的にとって，全体としての産業構造の人間社会の進化にたいする関係のより明確な認識と理解を得

るために，その発展と活動の法則を学び，そして，それと産業における他の主要な諸要因とのあいだに存在する関係やあるいは産業における諸力を観察することによって，近代的産業運動における一つの重要な要因を取りあげるというものである。この中軸的要因は，近代的産業にたいして特別に使用される描写的名称（descriptive title）たる**資本主義**によって示される。」[9)]

すなわち，ホブソンにとっての「資本主義」という用語は，「近代的産業運動における一つの重要な要因」をしめすものであって，「近代的産業にたいして特別に使用される描写的名称（descriptive title)」である，というものである。

端的にいえば，「資本主義」という用語は，近代的産業を描写するときに使われる「名称 title」にすぎない，とホブソンはみなしているのである。

『近代資本主義の進化』の初版のなかで，ホブソンが，「資本主義」用語の意味内容について述べている唯一の個所での説明がこれである。

そして，ホブソンは，そのような近代的産業にとっての「描写的名称」たる「資本主義」にとっての基軸的な主要要因は生産活動や運輸活動において使用されている機械であると，次のように指摘している。

「**資本主義**の進化における主要な物質的要因は機械である。製造業と輸送機関の目的のためとそして採取産業とに応用される機械の分量と複雑さの増大は，近代産業の拡大の物語りにおける大きな特別の事実である。」[10)]

このように，「近代的産業にたいする描写的名称」としてのホブソンの「資本主義」の基礎たる物質的要因は機械であり，「資本主義」概念の実体的内容は「機械制産業」である。

そのように，ホブソンの「資本主義」概念にあっては，生産活動における

機械の使用という産業技術的特質が規定的内容をなすものとされていて，人と人との社会関係としての生産関係のとる特有の社会的特徴や価値的側面における利潤追求的性格は規定的な要因とはみなされていない。

ホブソンは，近代的産業活動としての「資本主義」における貨幣的側面については，次のように述べている。

「近代的コミュニティにおけるあらゆる産業的行動はその貨幣的対応物をもっていて，その重要性はふつうには貨幣の項目で評価されるため，資本主義の成長はその貨幣的側面においてきわめて有効に研究されるに違いない。メカニカルな機械のもとでの生産方法の変化に対応して，われわれは複雑な貨幣的システムの急速な増大を見いだすであろうが，それは，その国際的および国内的性格において，近代的な生産的および分配的産業において見いだすところの主要な特徴を，信用のその洗練された構造において反映しているものである。しかしながら，……／われわれは，この研究においては，近代的交換のとくに市場の拡張と複雑さにおける精巧な貨幣的システムの産業的秩序への直接的影響のいくつかをたんにしめすにとどめて，われわれの関心を資本主義の具体的側面に限定することにする。」[11)]

すなわち，ホブソンは，資本主義の貨幣的側面については，たんに具体的な産業的行動にたいする貨幣的対応的側面とみなしていて，「産業的秩序への直接的影響のいくつかをたんにしめすにとどめて，われわれの関心を資本主義の具体的側面に限定することにする」としているのである。

そのように，ホブソンは，「資本主義」用語の理解にあたって，それを機械を使用しておこなわれる労働過程的側面における概括的な表現用語とみなし，そこから，『近代資本主義の進化』の初版における「資本主義」用語は，基本的には，機械制産業と同義の「描写的名称」であるとしているのである。

そこにみられるホブソンの「資本主義」用語は，近代社会における産業論的あるいは産業構造論的な視角からみた概括的事態について表現する用語であって，生産活動をおこなう産業についての表現用語として使っているのである。

そのようなホブソンの「資本主義」概念の基本的内容においては，機械制生産という一定の生産力水準をもった生産活動が，同時に，機械を含む生産手段が資本としての形態規定性をとり，生産手段を動かす人間労働が賃労働としての形態規定性をとって，資本＝賃労働関係のもとでの生産活動として利潤追求をめざす価値増殖過程がおこなわれるものであるという，近代社会特有の資本家的生産過程としての特徴的本質をもつものとしての把握はおこなわれていない。

すなわち，ホブソンの「資本主義」概念においては，機械を使って物的生産をおこなう労働活動が利潤追求という価値増殖活動をおこなう生産活動としておこなわれるものであるという，労働過程と価値増殖過程との統一としての資本家的生産過程としての規定的内容がとらえられないで，近代的産業における機械を使用しておこなわれる生産ということのみが規定的事態とされていて，それは機械を主要要因とした「近代的産業にたいする描写的名称」とみなされることになっているのである。

なお，ホブソンの「資本主義」把握には揺れがあって，彼は，「資本主義」という用語を，ときとして，前期的な商人資本やあるいは株式会社形態についての用語としても使っている。

たとえば，「前世紀の半ばにおいては，大資本が使われ，あるいは，資本が労働にたいして近代的な割合となっているような製造業的企業はきわめて稀であった。18世紀における**資本主義**のもっともすすんだ形態を表現しているのは，実際には製造業者ではなくて商人であった」[12]といった指摘や，あるいは，「南海会社（South Sea Company）の破産において最高頂に達した株式企業の異常な破裂は，あきらかに健全な資本家的協同（capitalist co-opera-

tion）にとっての狭い限界をしめした。……／産業革命の開始の時期における協同的な資本主義（co-operative capitalism）の限界は，アダム・スミスのきわめて重要な意義ある文章によってしめされている」[13]といったかたちで物的な機械制生産とはかかわりのない前期的な大商人や株式会社のなかに「資本主義」を見いだしたりもしている。

だが，最終章の第14章「文明と産業的発達」において使われている「資本主義」語は，「典型的形態における機械制産業および資本主義のもとに……」[14]といったかたちで，「機械制産業」と同義的なものとして使われている。

ところで，そのような「資本主義」という用語と概念は，ホブソンがこの『近代資本主義の進化』のなかで解明しようとしている基本的事態や，あるいはその規定的内容の把握にあたって，かならずしも必要な用語や概念ではなかったようである。

この初版におけるホブソンの「資本主義」という用語と概念は，機械制産業をしめす「描写的名称」に他ならないものであって，それ自身の特有の規定的内容をもつものではない。

そのため，そのような「資本主義」という用語は，近代的な機械制産業そのものを取り扱う第3章以降においてはまったく使用する必要がなく，実際に最終章での1回を除くとまったく使われていないのである。

「資本主義」という用語の使用回数の少なさと使用個所の偏りはそのことをしめしているものと思われる。

ところで，「資本主義」という用語は，すでにこの時点において，イギリスでは，一般読者が目にしたことのない珍しい言葉ではなくて，すでに一般的な通用性をもった言葉となっていたもののようである。

ホブソンが，「資本主義」という用語を書名に組み入れ，「索引」においても「資本主義 capitalism」項目をたてて2個所の該当ページを挙げるといったかたちで「資本主義」という用語を使用しながらも，「資本主義」という

用語の説明をおこなわないでいたということは，この時点においては「資本主義」という言葉はすでにイギリスにおいては一般性をもった言葉であって，今さらあらためて説明しなくても通用する言葉であるとホブソンは考えていたことをしめすものである。

それはともかく，この『近代資本主義の進化』という本の実質的内容からみるならば，本書の内容は近代的機械制産業の進化についての解明であって，したがって，そのような内容をしめす書名としては，サブタイトルにつけた『機械制生産の研究』か，あるいはメインタイトルで強調した「進化」という用語を組み入れるとすると『近代的機械制生産の進化』といった書名こそがふさわしいものである。

だが，それにもかかわらず，どうして，ホブソンは，ホブソン自身が近代の機械制産業の「描写的名称」に他ならないものとしている「資本主義」という用語をもちいて，『近代資本主義の進化』としたのであろうか。

その点については，ホブソンは，まったく明らかにしていない。

だが，『近代資本主義の進化』という書名には，本書における近代社会の経済的諸関係についての実証的把握におけるホブソンの現実感覚の鋭さとみずみずしさが感じられるところである。

読み込みすぎかもしれないが，近代的な機械制産業の進化的展開にとどまらないで，「資本」によって動かされ発展と変化をとげている近代社会の経済システムについての嗅覚が，ホブソン自身かならずしもそのような概念規定をおこなっていない「資本主義」という用語を使って『近代資本主義の進化』という書名をつけることにさせたのではないか，と感じられるところである。

そのことは，ゾンバルトの『近代資本主義』に接して後の，「資本主義」概念の再定義と「資本主義」用語の大幅な使用をおこなった本書の増補改訂版への取組みがしめしているように思われるところである。

3. ホブソンのマルクス評価

では，ホブソンとマルクスとの関連はいかなるものであったのだろうか。

ホブソンのこの『近代資本主義の進化』におけるマルクスとのかかわりについてみると，本書の初版のなかではマルクスへの言及は5回あるが，そのうち4回は機械にかんする言及であって，次のようなものである。

「機械とたんなる道具や手工的用具との区別にあたっては，構造の複雑性および機械との関連における人間の活動性との2つの点に特別の注意をはらうことが望ましい。そのもっとも発達した形態における近代的機械は，カール・マルクスが指摘しているように，メカニカルに結びついている動力機構，伝導機構，そして道具あるいは作業機との，本質的に異なっている3つの部分から成り立っている。」[15)]

だが，それ以外に，機械の改良による労働生産性の上昇は労働者にとっても多少の賃金上昇をもたらすことがありうるということを，マルクスへの批判を込めて指摘している叙述もある。

「余暇の増加とより高い賃金とが高価につきすぎることになる，ということをしめす証拠に不足することはない。／しかしながら，この考察に注意を向けるにあたって，向上している産業にみられる実質賃金の増大と時間の短縮とが，かならずそれに見合った労働の圧縮〔密度〕の増大をともなうと想定すべきではない。たとえば，織物業と鉄工業においては，工員は，改良された機械の生産性増加の多少の部分を賃金増加において手に入れた，ということは明らかである（カール・マルクスには失礼ながら）。」[16)]

ところで，ホブソンは，『近代資本主義の進化』の執筆時点において，すでに『資本論』は読んでおり，その内容については十分に承知のうえで，近代社会の経済構造についてのマルクスの資本主義把握にたいしては基本的に無視したようである。ホブソンは自伝『異端の経済学者の告白』のなかで次のように述べている。

「このこと〔ホブソンの過剰貯蓄という異端説〕は，しかし，1890年代はじめの私の最初の充実した経済学的著作でありイギリス型産業革命のもとに包摂された産業変化を客観的にしめした『近代資本主義の進化』のうちには，はっきりとは読みとれない。私はマルクスの『資本論』の第1巻の英訳をその数年前に読んではいたが，彼の革命的攻撃の価値を評価しようとは試みなかった。私がためらったのは，一つには，あらゆる生産費を，現実の産業では通用しない共通尺度である労働時間の単位で表現しようという彼の誤った――と私には今でも思える――試みによるのであり，また一つには，空虚な知的逆説を使ってごく分かりやすい歴史過程に神秘主義的雰囲気を添えるヘーゲル流の弁証法によるのであった。私の『近代資本主義の進化』は，私が研究した現実の過程のなかに自己を表現しないような理論はすべて無視したのである。その主な意義は科学的な研究だという自負にある。」[17)]

ここでの指摘をみると，ホブソンのマルクス無視は，『資本論』における近代社会の経済構造についての理論的解明にたいする内容的な批判によるというよりも，むしろ，マルクスの『資本論』の晦渋な文体とヘーゲル的な論理にはなじめなかったためのようである。それは，理論的批判というよりも，むしろ心理的，感覚的あるいは生理的反発を感じて拒否反応をもったことによるもののようである。

そのため，マルクスの「資本家的生産」を基礎要因とした「資本家的生産

様式」という用語にしめされる近代社会の社会経済システムとしての経済諸関係の把握とそこにおける歴史的形態規定性についての理解は，まったく受けとめられていない。

そして，近代社会の経済諸関係の基本的把握についても，その規定的要因についての資本主義用語についても，マルクスの見解は基本的には無視されていて，用語的な継承関係もなかったようである。

そのため，ホブソンは，その『近代資本主義の進化』においては，マルクスの基軸的用語たる「資本家的生産様式 mode of capitalist production」なる用語は取り入れていない。

それと似たような用語表現として，「近代資本家的生産方法 methods of modern capitalist production」と「生産の近代資本家的方法 modern capitalist methods of production」という用語が，「生産の近代資本家的方法が一時的失業をひきおこす3つの現れ方がある」[18]とか，「近代資本家的生産方法は，消費者としての役割において，労働者にいったいどれだけの利益をもたらす傾向があるのだろうか」[19]といったかたちで，1回ずつ使われたりもしているが，それは一般的な用語法として使われているものであって，マルクスの資本主義範疇としての「生産様式 mode of production」の近代社会における「資本家的 capitalist」形態という用語との繋がりをもった用法とは思われない。

また，それ以外にも，マルクスの資本主義的用語と同じ言葉としての「資本家的生産 capitalist production」という表現用語が4回，「資本家的体制 capitalist system」が2回，「資本家的所有 capitalist ownership」「資本家的経済 capitalist economies」「資本家的企業 capitalist farm」がそれぞれ1回ずつ使われているが，しかし，これらの用語も，マルクスの場合のように近代社会の歴史的形態規定性をもったものとしての「資本家的生産様式」にかかわる諸要因・諸形態とされているものではない。

そのようにホブソンにおいては内容的にも用語法的にもマルクスとの結び

つきは見いだせない。

だが，ホブソンの経験論的な実証主義的分析方法による現実分析の内容は，『近代資本主義の進化』にみられるような近代的経済の発展のなかでのカルテルなどの独占体の把握や，あるいは，『帝国主義論』における把握といったきわめて現実感覚のある実証的把握がおこなわれているものであって，それがマルクス的な歴史的形態規定性をもった資本主義的概念にもとづく構造的把握を受けとめながらおこなわれたとしたら，さらに理論的にもすばらしい成果を生みだしたに違いないと思われるところである。

IV. 1906 年以降の増補改訂版

1. 増補改訂の内容

1902 年，W. ゾンバルトの大著『近代資本主義 *Der moderne Kapitalismus*』初版が出版された。

それを読んだホブソンは，自己の『近代資本主義の進化』における「資本主義」用語の修正と展開をふくむ大幅な書き換えをおこなった増補改訂版を出すことを決意する。

ホブソンの『近代資本主義の進化』は，1894 年に初版が出版された後，1901 年，1906 年，1917 年，1919 年，1926 年等々と版を重ねたが，内容的に増補改訂されたのは，1906 年版と 1917 年版と 1926 年版との 3 回である。

その増補改訂された内容については，ホブソン自身がそれぞれの版の「序文」において指摘している。

1906 年版については，ホブソンは，「この『近代資本主義の進化』の新増補版は，実際には新しい著書を構成するほどの大きな増補と変更を含んでいる」[20] と述べている。

この 1906 年版においては，「初版における初期の歴史にかんする諸章の事実の大部分は保留されながら，多くの訂正と追加がおこなわれ，「近代資本主義の起源」についての序論的な章が，主としてゾンバルト教授の大著『近代資本主義』(1902 年) における研究にもとづいて，挿入された」としている。

そして，さらに，この 1906 年版では，「近代産業における集中力，産業的コンビネーション，トラスト，カルテル等々の発達を取り扱う諸章は完全に書き換えられ」，そのうえ，第 10 章「金融業者」が新設されて「近代産業における金融業者によって占められる地位の分析が，南アフリカおよびアメリカにおける最近の発達からの例証でもってしめされている」という。

再改訂版としての第 1 次世界大戦開始後の 1917 年に出された版では，長い追加の章が加えられて，「20 世紀の開始期における経済運動を要約し，そのあとで〔第 1 次世界〕戦争の経験によって現われた若干の経済的事実ならびに経済的勢力，それらのものの包含する諸問題，およびそれらのもののしめす傾向等が論究」[21] されている，という。

さらに，第 1 次世界大戦後に最終改訂版として出された 1926 年の版では，この版につけ加えられた長文の補論において，「20 世紀の最初の四半世紀における特徴的な商業と産業との主要な運動を追跡し説明するよう努めた」のであって，大戦以前・戦争期・戦後期それぞれにおける各種の変化について「事実と数字によって，近い将来の資本主義の推論的予見への寄与」[22] となる整理がおこなわれている，としているのである。

ここでは，その各版における増補改訂の詳細に立ち入ることはできないので，最終改訂版たる 1926 年版を 1894 年の初版と比べることにするが，章編成については次のような相違がみられる。

初版にあった章のうち，第 12 章「近代産業における女性」と第 13 章「機械と近代都市」との 2 つの章が取り除かれており，第 1 章「序言」は大幅な削除と書き直しがおこなわれ，第 5 章「資本における独占の形成」は全面的

に書き換えられている。

そして，増補改訂版においては，まず，初版にはなかった第1章「近代資本主義の起源」が挿入されて，ゾンバルトに依拠しながら「資本主義」の定義づけやその歴史的起源についての叙述がおこなわれている。そして，初版の第1章「序言」は，増補改訂版では，大幅な削除と変更がおこなわれ「資本主義の要具」という変更された見出しがつけられて，第2章とされている。

さらに，第5章「近代企業の規模と構造」，第10章「金融業者」，第16章「国民の職業」が新しく組み入れられている。また，初版の第5章「資本における独占の形成」はまったく書き換えられて，増補改訂版では第7章「資本の結合」と第8章「カルテルとトラスト」とされている。

さらに，初版の第7章に付けられていた「補論1」と「補論2」はなくなっているが，1926年版においては，それとは異なる「20世紀における産業」と題された長い「補論」が，第1部と第2部とにわけて第17章のあとに追加的に付加されている。

その結果，初版では14章構成となっていたのが，1926年版では17章構成となっていて，ページ数（本文のみ）も初版の383ページから1926年版では493ページへと大幅に増えるにいたっている。

ところで，『近代資本主義の進化』の増補改訂版においては，「資本主義」という用語の使用回数が，初版に比べて飛躍的に増えている。「資本主義」という用語は，初版においては本文のなかではわずか7回しか使われていなかったのが，1926年の改訂版においては94回も使われている。

だが，そのように増加した「資本主義」という用語は，そのほとんどが新しく立てられて挿入された章か，大幅に書き換えられた章において使われているのであって，初版から引き継いだ章ではほとんど使われないままとなっている。

1926年版においては，新設されている章での「資本主義」用語の使用数

は，第1章「近代資本主義の起源」32回，第5章「近代企業の規模と構造」15回，第10章「金融業者」11回，第16章「国民の職業」3回，補論「20世紀における産業」11回となっている。そして，叙述が大幅にあるいは全面的に書き換えられた章についてみると，第2章「資本主義の要具」7回，第7章「資本の結合」3回，第8章「カルテルとトラスト」7回となっている。

それにたいして，初版の章を引き継いだ章においては，第3章「資本制以前の産業構造」では初版の2回が3回に，第14章「文明と産業的発達」では初版の1回が2回に増えているだけで，それ以外の章では「資本主義」という用語はまったく使われないままとなっている。

さらに，索引についてみると，「資本主義」という索引項目は，初版の場合は，「資本主義」項目に2個所の掲載ページが挙げられていて，それに「成長における諸要因」という小項目が1つ立てられていただけだったのが，1926年版の索引における「資本主義」項目には，10個の小項目――「定義」「第1次的条件」「貨幣的基礎」「初期の蓄積」「発達におけるイギリスの優越性」「要具」「各時代」「国家的進歩の条件」「集中」「合同」――が立てられていて，それぞれの掲載ページが挙げられている。

このように，「索引」においても，改訂版における「資本主義」用語についての増加状況がしめされている。

ところで，そのように増補改訂版では「資本主義」という用語の使用数が大幅に増えただけではなくて，「資本主義」概念の内容そのものについても変更がおこなわれているのである。

2. 増補改訂版における「資本主義」語

ホブソンは，増補改訂版において新たに挿入した第1章「資本主義の起源」の叙述を，次のように「資本主義」という用語の定義づけから始めている。

「資本主義は，利潤を構成するであろう富の増加量を生産するために，原料と道具を獲得し労働を雇用するところの富の蓄積されたストックを所有する雇主または雇主の会社による大規模の企業の組織であると，とりあえず定義されうる。歴史の過程において，一定の基本的な経済力と道徳的な力との結合が現われているところでは，どこでも，なんらかの形態と規模における資本家的産業が存在する。これらの基本的条件は，次のように列挙することができる。

第1に，所有者の日常的な欲望の満足に必要でなくて，貯蔵される富の生産。

第2に，自己の生産的労働力を，自由に所有し購入しもしくは賃借することのできる材料に注入し，その生産物を自己自身の利益のために消費したり売却したりすることによる独立の生計をもたらす手段を奪われた，プロレタリアートあるいは労働階級の存在。

第3に，道具やあるいは機械を使用する組織された集団労働にたいして儲かる雇用をあたえる生産の間接的方法を可能にするような産業的技術の発展。

第4に，資本家的生産の生産物を消費することを欲し，経済的にも可能な人口をもった，大きくかつ接近可能な市場の存在。

第5に，資本家的精神，あるいは蓄積された富を産業的企業の組織により利潤獲得のために充当する欲望と能力。」[23)]

ホブソンは，そのように改訂版における「資本主義」の新しい定義をしめすとともに，かつて初版においておこなっていた「近代的産業にたいして特別に使用される描写的名称たる資本主義」という「資本主義」の定義づけ部分を削除している。

そのように，ホブソンは，「資本主義」という用語の概念内容を，初版においては，近代的な「機械制産業」についての「描写的名称」としていたの

にたいして，増補改訂版においては，「資本主義」とは，① 蓄積，② プロレタリアートの存在，③ 産業的技術，④ 市場，⑤ 資本家的精神の5点を本質的条件とした「資本家的産業」であり，そのような一定の内容をもった「企業組織」である，と定義づけているのである。

このように，初版における「資本主義」の定義が，近代的な「機械制産業」という労働手段を基軸とした技術的な側面に視点をおいた産業形態としての定義づけであったのにたいして，増補改訂版における「資本主義」の定義は，社会経済的な諸関係における広がりをもったものとなっていて，産業的技術は5つの条件のなかの1つにすぎないものとされている。

しかも，その「産業的技術」についても，初版における労働手段としての機械の使用という工学的な技術的特徴に視点をおいた把握から，大きく転換して，増補改訂版においては，「道具やあるいは機械を使用する組織された集団労働にたいして儲かる雇用をあたえる生産の間接的方法を可能にするような産業的技術の発展」といったかたちで，「儲かる雇用」を可能にする産業的技術として利潤獲得という特徴づけをもったものとしているのである。

そのこともあってか，初版において7個所で使われていた「資本主義」という用語のうち，初版での「資本主義」の定義づけをおこなっている叙述部分が削除されているだけでなく，第14章「文明と産業的発達」における「機械制産業および資本主義のもとに」という機械制産業と資本主義とを同列においた初版での叙述が，改訂版では「機械的経済のもとに」という表現となっていて「資本主義」という言葉は削除されている。

だが，それ以外の5個所の「資本主義」用語はそのまま残っていて，初版第1章にあった「資本主義の進化における主要な物質的要因は機械である」という叙述は，そのまま改訂版においても存続している[24)]。

そのように，増補改訂版における「資本主義」という用語の概念内容は，初版における「機械制産業」という技術的要因を規定的内容とした産業論的事態にかかわる把握と，増補改訂版において新たに打ちだされてきた社会経

済的な要因を規定的内容とした把握との，2つの把握が存在しながら，ホブソンはそれを重層的なかたちで「資本主義」用語の内容的拡充をおしすすめようとしている。

すなわち，ホブソンは，「近代的産業資本主義の具体的基礎は，生産過程の促進において労働を援助する工場，機械そして大量の高価な用具の，『固定的』要素の大きく複雑な構造である」[25]と，近代産業資本主義の基礎は生産過程における工業，機械，生産用具といった「固定」資本部分であるとみなしながら，「資本家的ビジネス」の構造と機能の進化について，市場構造や企業経営の変化，雇主・資本家・労働者の関係の変動，金融的あるいは会計的側面等にいたる事態を問題にするのである[26]。

そのような増補改訂版における社会経済的把握の広がりにおける「資本主義」概念は，増補改訂版において新たに立てられた章や大幅に変更された章においてみられるところである。

増補改訂版において新しく立てられた章においては，カルテル，トラストといった産業独占体について追加的な具体的事実を解明している章以外には，近代的金融，株式会社企業，金融業者，株式投機，大金融資本等々に取り組んだ第10章「金融業者」，あるいは，職業分布とその変遷について取りあげた第16章「国民の職業」，さらに，1926年版での，「20世紀の最初の四半世紀における特徴的な商業と産業との主要な運動」が取り扱われている補論「20世紀における産業」といった，近代社会の経済的諸関係のより大きな広がりにおいて「資本主義」が取りあげられている。

増補改訂版のなかで，ホブソンは，近代における経済的発展のなかでの就業者の職業分布の変動を取りあげながら，「これらの移動〔職業移動〕は，部分的には，改善された機械の経済および付随的な労働組織をつうじての資本主義の進化の表現であることは，明らかである」[27]としながら，「近代資本主義の時代をつうじておこっている一国民にとっての職業の正常な発展は，次のようなものであろう」[28]として，農業，工業，運輸，商業，金融，サー

ビス業，専門職などにおける職業分布の変動状況を取りあげており，そこにおいては「資本主義」という用語は国民経済的な視点からの用語として使われている。

そして，ホブソンは，19 世紀末，次第に経済活動の基礎に根を強固にはるようになってくるカルテル，トラストなどの産業独占体や巨大金融機関によって支配体制を強化する金融資本をもとらえ，さらに，国際的企業連合や国際カルテルを取りあげながら，「国際的資本主義」について，「価格設定力をもった国際的企業連合の発達は，遅かれ早かれ，諸国政府のあいだの協定による保護的方策を呼びおこすに違いない。国際連盟およびその関係機関たる国際労働局の仕事のなかにすでに認められている経済的国際政策の端緒は，より明確な意図をもって，国際的資本主義によって支配されている物品とサービスの価格と分配を，公正な条件で調整する仕事に取り組むに違いない。」[29]としている。

そして，最終章たる補論第 2 部においては，将来的展望における資本主義の倒壊と社会主義への代替について述べるというかたちで，「資本主義」という用語は，「社会主義」と対比されながら，歴史的性格をもった近代社会についての社会体制としての意味におけるものとして使われているのである。

「イギリスでは，アメリカを除く他のすべての先進産業諸国におけるように，一つの有力な政党が正式に社会主義を奉じているが，その態度はそれほどきちんとした説明のできるものではない。それは，私的資本主義を倒壊して，一般的社会主義，国家社会主義あるいはギルド社会主義その他のものへの代替を求めるものとははるかに遠いものである。それは，多分に日和見主義的，試験的，経験主義的，そして妥協的なものである。しかし，それは国家の行動をビジネス世界に多種多様なかたちではいり込ませる。中央集権的専制主義とそして深く根ざしているその制度の欠陥への嫌悪の

ため，おそらくいかなる西欧諸国も全面的規模での産業の公的所有や運営に頼ることはありえないであろう。しかしながら，一定のきわめて重要な産業およびサービスにおいて，おそらく急速ではないであろうが，私的所有の公的所有への置き換えに向かう着実な運動がおこるであろう。」[30)]

ここにおいては，ホブソンは，「資本主義」という用語を，近代社会についての社会体制をしめす用語として使っているのであるが，そのような近代社会の社会体制としての「資本主義」と，ホブソンが本来もっていた「機械制生産」による産業という「資本主義」の基礎的要因との関連はどうなるのか，「資本主義」の倒壊は「機械制産業」の廃棄をともなうことになるのかどうか，さらに，新たに展望される「社会主義」の生産的基礎は「機械制産業」とは違ったものになるのか，といった問題が出てくるところであろう。ホブソンの「資本主義」用語の規定的内容については，概念的に吟味される必要のある論点が数多く存在している。

ともあれ，そのようにホブソンにおける「資本主義」という用語は，初版においては基本的に生産的基礎における機械制産業に限定されていたのが，増補改訂版においては，商業，金融における事態にまで，そして，社会における職業分布といった国民経済全体にとっての事態や，国際経済関係にまでもの広がりにおけるものとなっており，さらに，社会主義との対比における近代社会の経済システムとしての歴史的な社会体制をしめす用語にまでいたっているのである。

〔注〕

1) ホブソンの旺盛な執筆活動については，ホブソン『異端の経済学者の告白　ホブスン自伝』（1938 年）の邦訳者（新評論，1983 年）高橋哲雄氏の「訳者あとがき――ホブスン再評価のために――」にきわめて詳細な「執筆目録」が掲載されている。それによると，ホブソンの編・著書，パンフレットは 77 点（高橋氏の目録によるもの 73 点，アラン J. リーにより追加されるもの 4 点），論文については 165 点（リーによる論文，新聞投書，報告，講演は 658 点とされている）と指摘され

ている。

2) この主要著作についても，前注1)の上記高橋哲雄氏による「訳者あとがき」に挙げられた著作目録に拠っている。

3) J.A. Hobson, *The Evolution of Modern Capitalism, A Study of Machine Production,* 1894, London, p.v.

4) ホブソン，前掲訳書，32–33ページ。

5) Hobson, *op. cit.,* p.v.

6) 高橋哲雄「訳者あとがき――ホブスン再評価のために――」，ホブソン，前掲訳書，213ページ。

7) Hobson, *op. cit.,* p.6.

8) Capitalism という用語が使われているのは，pp.4, 5, 7（2個所），40, 42, 360 の7個所である。

9) Hobson, *op. cit.,* p.4.

10) *Ibid.,* pp.5–6.

11) *Ibid.,* p.7.

12) *Ibid.,* p.40.

13) *Ibid.,* p.42.

14) *Ibid.,* p.360.

15) *Ibid.,* p.45.

16) *Ibid.,* p.278.

17) ホブソン，前掲訳書，32ページ。

18) Hobson, *op. cit.,* pp.240–241.

19) *Ibid.,* p.285.

20) Hobson, *The Evolution of Modern Capitalism, A Study of Machine Production,* 1926, London, p.v.

21) ホブソン『近代資本制発達史』（1916年版）巌松堂書店，1929年，「新修正版に対する原序」1–2ページ。

22) Hobson, *op. cit.,* 1926, p.iv.

23) *Ibid.,* pp.1–2. ホブソン『近代資本主義発達史論』（1926年版）1932年，改造社，（上巻）22–23ページ。なお，訳文は本書に依らないで変えている。

24) *Ibid.,* p.27. 同上，62ページ。

25) *Ibid.,* p.19. 同上，50ページ。

26) *Ibid.,* pp.25–26. 同上，58–59ページ。

27) *Ibid.,* p.394. 同上，（下巻）279ページ。

28) *Ibid.,* p.397. 同上，284ページ。

29） *Ibid.*, p. 449. 同上，358 ページ。

30） *Ibid.*, pp. 485–486. 同上，411–412 ページ。